

地震活動静穏化の定量的評価手法の研究

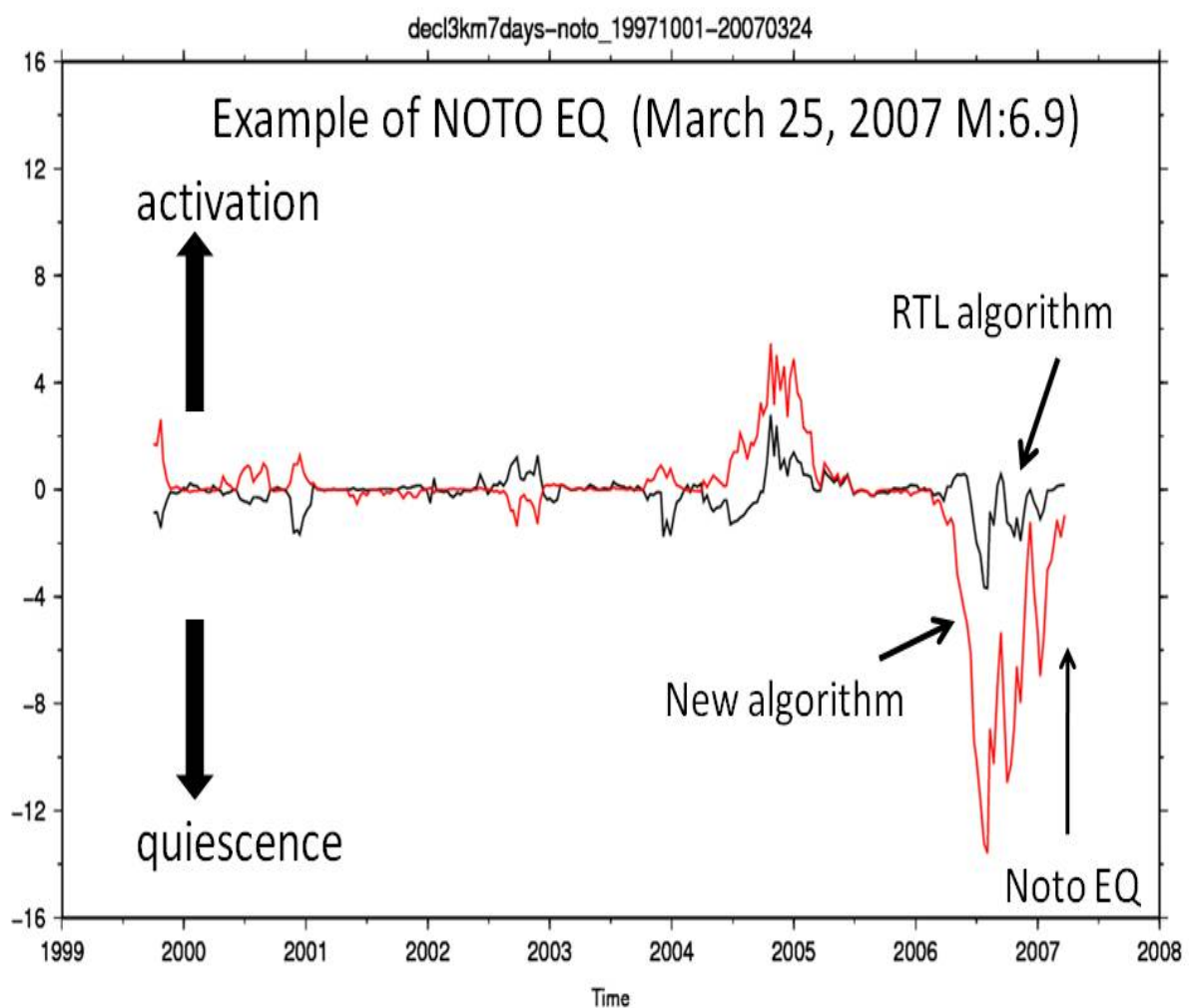
The proposal for the quantitative evaluation method for seismic quiescence phenomena

長尾 年恭^{1*}, 中村憲二¹, 竹内昭洋¹, 黄 清華²

Toshiyasu Nagao^{1*}, Kenji Nakamura¹, Akihiro Takeuchi¹, Qinghua Huang²

¹東海大学地震予知研究センター, ²北京大学

¹Earthquake Prediction Research Center, T, ²Peking University



地震活動度変化を用いて将来の地震活動を予測しようという考えは古くから存在するが、たとえば日本でもHi-netの出現により、地震カタログの精度等が飛躍的に高まり、研究は新たな段階に入ったと言えるだろう。東海大学では「大きな地震（L：rupture Length）は、長い期間(long Time)、遠くまで(far Region)影響を与える」というコンセプトで開発されたRTLアルゴリズムの研究を従来から行なっている。しかしながら、retrospectiveには静穏化が最も顕著に表現できるパラメータ（地域およびマグニチュードレンジ等）を示す事は出来るが、本震発生前にそれらを示す事は極めて難しい。講演ではRTL法の改良とともに、パラメータテーブル（解析半径、解析期間、マグニチュードレンジ等）を作成し、一定の条件を満たした時に機械的に静穏化を評価できる手法を提案する。

キーワード:静穏化,RTL

Keywords: seismicity, quiescence, RTL